

## 宗峰妙超の諸相

竹 貫 元 勝

こんにちには、只今、石井修道先生のご鄭重なる紹介に預かりました竹貫でございます。先ほど、ご発表を拝聴させていただきました。精緻をきわめる真摯なご研究に敬服致し、また研究者の層が厚いことに感じるところがあり、用意してまいりました講演内容が概観的で、恥ずかしく思いながらですが、始めさせていただきます。宜しくお願い致します。

今も話に出ておりましたが、日本の禅宗は五山と林下に分けて把握されておりまして。こと臨済宗の大徳寺・妙心寺は、林下の範疇で捉えられていますが、実は大徳寺なんかは五山に位置付けられたり、十刹になったりして、後に官刹から外されたという経緯があります。妙心寺の方は、官刹になったことは一度もなく、文字通りの林下ということになります。しかし、大徳寺や妙心寺には、五山に対するものとして、「山隣派」と称する語があります。ですから、林下とするよりも、その山隣派を用語にするのが至当ではないかと考えているのです。

それはともあれ、現在の臨済宗というのは十五本山で、十

五派ということになるのですが、その法系をさかのぼっていきますと白隠慧鶴（神機独妙禅師・正宗国師）にいきつきまします。江戸時代の中頃には臨済宗の諸派は殆ど絶法しておりまして、法系が残っていたのは、白隠を遊る関山慧玄、宗峰妙超（大燈国師）、南浦紹明（大応国師）の一系統です。この系統が今日唯一の臨済宗の法系なのです。それで大応の「応」と大燈の「燈」と関山慧玄の「関」とをとり、「応・燈・関」といふ言い方をして、応燈関一流、あるいは応燈関門流といつて、今日の臨済宗は集約されています。

この「応燈関」に対し、大徳寺には「応燈徹」という考えかたがあります。大徳寺第一世徹翁義亨という人がおりまして、大燈禅の正系は「応燈徹」ではないかという説です。沢庵宗彭（一五七三〜一六四五）後に絶法しますので、その後はやはり応燈関ということになると思います。

その応燈関、応燈徹の「燈」である大燈国師、宗峰妙超が今日の課題です。

## 一、宗峰妙超像

宗峰妙超（一一八二丁—一三三七）は、紫野の大徳寺の開山です。大徳寺といえは茶の湯で知られ、「大徳寺の茶面」とも称されますが、茶の湯の世界では、宗峰妙超の名称よりも大燈国師の方がよく知られております。しかし、山隣派系の禅僧は、五山僧に比べると知名度は低いようです。

今日の話は、宗峰妙超の諸相という題を出していますが、宗峰妙超という人は、いったいどのように捉えられている禅僧なのか、大維把に話をしておきますと、宗峰妙超という人は、修禅専一の大燈禅をかかげ、学徒を厳しく指導した禅僧だと捉えられています。しかも非常に清貧に甘んじた生活をされて、名利に走らず、寺院経営には無関心であった。そういう禅僧が宗峰妙超だと、このようにいわれております。

さて、「それでいいのか」、本当に宗峰妙超という人は、寺院経営に無関心だったのか、あるいは寺院経済に関わる寺領庄園に関知しなかったのでしょうか。また、宗峰妙超について、明らかにされるべき重要な事柄があるのではないのでしょうか。これは、宗峰妙超を如何に日本史の粗上において紐解くかを考え、またその史的位置づけを試みようとするとき、研究史を追っていくなかで懐く素朴な疑問点なのです。

宗峰妙超は「示衆法語」に、「汝ら諸人、此の山中にあつ

て、道の為に頭を聚む、衣食の為にすること莫かれ。肩有つて衣すといふこと無く、口有つて喫わずといふこと無し。只だ須く十二時中、無理会の処に向かつて、窮め来り究め去るべし、光陰箭の如し、慎しんで雑用心すること勿かれ」といいます。

また、遺誡法語に「老僧行脚の後、或は寺門繁興し、仏闍経巻に金銀を纏め、多衆鬧熱、或は誦経調侃、長坐不臥、一食卯齋、六時行道、直饒恣麼にし去ると雖も、仏祖不伝の妙道を以て、胸間に掛在せずんば、則ち因果を撥無し、真風地に墜つ、併、是れ邪魔の種族なり、老僧世を去ること久しくとも、児孫と称することを許さず」、「一把茅底、折脚鐺内に野菜根を煮て喫して日を過すとも、専一に己事を究明する者は、老僧と日々相見、報恩底の人なり」ともいつています。

このことから宗峰妙超は、経済的な問題には、一切かかわらない禅僧というふう捉えられています。あるいは、「修禅専一」で、坐禅をさせて学徒の指導をし、そのところには、学問とかお経を読むとか、そういうことをやらせなかつた、というようなことが強調されるのです。

このような宗峰妙超像が出てくる出所を探ってみますと、それはどうも応燈闍門流の開山慧玄に関わりがあるように思われます。

妙心寺開山の関山慧玄は、頂相が無い、語録が無いのです。

関山慧玄が作るな、残すなといったかららないのです。また、関山慧玄は妙心寺の礼楽に関知しなかったといえます。妙心寺の礼楽がとこのえられるのは三祖の無因宗因になってからです。

さらに、逸話として伝えられていることですが、妙心寺は花園天皇の離宮だったのですが、雨漏りがする建物で、雲水にそれを受ける物を持ってこさせます。桶を持ってきます。これは常識的ですね。それを見た関山慧玄は叱声して、箆を持ってこいというのです。このような話が残っていて、文字通り質素で枯淡な修禅専一の禅僧であったのです。

かかる関山慧玄の師匠である宗峰妙超もそうであって欲しいというか、そうであったのではないかという意識が潜在し、それが宗峰妙超の禅僧像を語る発想の起点になり、坐禅を専らとする禅僧像が強調されるようになったのではないのか、そのような気がするのです。

それはそれで宗峰妙超に対する一つの捉え方なのですが、視点を変えたいと思いますか、切り口を変えたいというか、史的観点において少し捉え直してみる余地があるのではないのか、そのように思っています。

## 二、風浪水宿の聖胎長養

宗峰妙超という人は播磨の人で、龍野が生誕地です。「赤

とんぼ」の童謡で知られる詩人三木露風や、内海青潮、三木清、矢野勤治などの文化人が出ているのですが、この龍野が出した禅僧なのです。弘安五年（一一八二）に生まれて、建武四年（一一三七）に亡くなっております。世寿五十六で

す。幼い頃は神童といわれ、やがて仏道に目覚めて、十一歳に書写山で仏教を学び、二十歳頃に京都に上り、さらに鎌倉に旅をして、高峰顕日（仏国国師）に出会い、ついに出家します。まもなく、印可されるのです。

高峰顕日の弟子では、夢窓疎石が有名ですが、宗峰妙超も高峰顕日に印可されているのです。しかし、社会に出て禅の宣揚活動をせず、さらに京都に上り南浦紹明（一一三五—一一〇八）に参じたのです。

この南浦紹明という人について、少しお話ししなければなりません。南浦紹明は正元元年（一一五九）に宋に渡航し、虚堂智愚の印可を得て文永四年（一二六七）に帰朝します。一端鎌倉にあった後、筑前に赴き、嘉元二年（一一三〇四）まで鎮西にとどまった人です。ちょうど文永・弘安の役の頃ですから、おそらく鎌倉幕府の指示があつたことではないかというの、私の考えなのですが、確認し得る史料がないのです。

その南浦紹明が後宇多上皇の勅請に応じて上京します。宗

峰妙超はその南浦紹明について修行し、「雲門の関」の公案を透過して、印可されます。二十六歳のときです。天下の二甘露門と称された二禅僧から印可された宗峰妙超なのです。

南浦紹明は、宗峰妙超に「二十年の聖胎長養」を命じます。

二十年後といえば、宗峰妙超は四十歳代も後半にさしかかることになるのです。聖胎長養を言い渡した南浦紹明も相当の覚悟をもつての決断であつたと思います。いかに南浦紹明が本物の禅僧を世に出そうとしていたか、その真剣な姿勢を看取し得るのです。

その聖胎長養をどこでやったかという点、京都です。東山の雲居庵に隠棲し、この地で悟後の修行に入つたといつては、その雲居庵の地は、今日、豊臣秀吉の室、北政所高台院湖月尼の開創した鷲峰山高台寺（臨済宗建仁寺派）、つまり「ねね（寧々）の寺」で知られている高台寺あたりではないかと推測されています。また五条の大橋、今の五条の大橋は違います。それより北に五条の大橋がありました。そこに中洲があり、今は北の方に移っていますが、安倍晴明の晴明神社もあつたといひます。東から京都に入るにも出て行くにも、人はこの橋を通つたのです。

宗峰妙超の聖胎長養を見逃さなかつた一休宗純は、『狂雲集』に宗峰妙超がなした悟後の修行を重視して、一偈を詠んで注目しています。

「大燈を挑げ起して一天に輝く、鷲興嘗を競う法堂の前、風浪水宿人の記するなし、第五橋辺二十年」と、五条橋の辺における二十年の風浪水宿をいう一休宗純です。

また、この頃の宗峰妙超に関する伝承として、つぎのような道歌が伝えられています。「坐禅せば、四条五条の橋の上、行き来の人を、深山樹に見て」と、風浪水宿の聖胎長養を東山、ときには四条橋や五条橋辺とした宗峰妙超なのですが、そこは「行き来の人を深山樹に見て」というように、人の往来が激しい所、雑踏の中で坐禅三昧にあつて心を揺るがされることがなかつたと、宗峰妙超を称賛する歌です。

しかし、四条五条の橋の上を行き来する人の中に身を置くことの意味は、それだけではなかつたと思います。

文字通り巷にあつて、民衆の目線で時代の動向を見つめることが出来る絶好の場所でもあり、また時代に生きる人々が求めているものは何なのかなど、そうした情報を肌で感じて、手に入れる絶好の機会にもなつたはずですよ。

さらに、禅僧としてどのように活動し、教化することが時代社会の要求に応えることになるのか、それを感知する機会でもあつたと考えます。

臨済宗の宗名は、臨済院の寺名から付いたものであるけれど、その「臨済」は、陀河のほとりに臨み、一切衆生（群生）を利済するという意味であり、民衆利済は臨済禅の根本精神

なのです。

かかる臨濟禅を嗣ぐ宗峰妙超は、その精神を如何に実践するべきなのかなどについて、静寂の深山幽谷でもなく、僧堂内でもなく、巷に生きる人々の現実を目のあたりにしながら、臨濟禅の根本に立ち返つて考えることができたものと思われる。

そうした環境に身を置くことを自ら選んだ宗峰妙超の悟後の修行は、聖胎長養二十年を命じた南浦紹明の本意にかなうものであり、その期待に応えた宗峰妙超であつたと考えられます。

同じ頃、高峰顕日の法嗣夢窓疎石は、各地を転々としていますが、この夢窓疎石もまたその移動過程にあつて、時代の流れを感知して、情報を収集し、ついに後醍醐天皇の外護を受け容れます。宗峰妙超は京都に止まつて、夢窓疎石は移動して、ともに時代の流れをよみとつていたと思われまふ。この止と動の違いをみせた二人の禅僧ですが、夢窓疎石は万余の弟子を有し、五山の主勢力をなします。かたや宗峰妙超は雲居庵に聖胎長養のころ、衲子纒かに六、七人であつたといひます。このことに両者の宗風の相違の一端を看取することができるとは思ひませんが、そのようにも思われまふ。

やがて、宗峰妙超は東山雲居庵から洛北の紫野に居を移します。紫野に移つた年次は、史料によつて諸説あり特定が難

しいけれど、ここに小庵を結んで居し、これより宗峰妙超の紫野時代が始まることになり、終焉の地となるのです。

宗峰妙超が聖胎長養をきりあげた年次については、研究者の中で問題になつてゐるけれども、私は、大徳寺を開創した嘉暦元年（一一三六）だと考えています。大徳寺を開創した時に、宗峰妙超は嗣法香を焚きます。嘉暦元年（一一三六）は宗峰妙超四十五歳ですから、それで、二十六歳から聖胎長養に入りますと、その年をいれてちょうど二十年になります。

二十六歳から四十五歳に至る二十年間の宗峰妙超の行状は、聖胎長養のもつ性格から当然のこと、空白の二〇年といふことになるといつても過言ではないのですが、『景德伝灯録』三十巻の書写と祥雲庵で夜話した『祥雲夜話』があります。その後における宗峰妙超の行状や年譜などの編纂もの以外の史料で押さえ得るのは、元亨期になつてからといふことになりまふ。

その元亨二年（一一三二）には、「宗円禅人」に法語を書き与へてゐることなどを知り、翌元亨三年（一一三三）になると、古記録史料によつて知る確かな行状が明らかになります。『花園天皇宸記』に、宗峰妙超から印可される花園上皇との法談のことが初見します。ついで、元亨四年（一一三四）、宗峰妙超は寺地の寄進を後醍醐天皇から受けて、契券を書い

ています。

宗峰妙超は、仏殿を造るなどといった人でしたが、一番大事な法堂が出来る前に、既に花園法皇から祈願寺、後醍醐天皇からも祈願所として指名を受けています。後醍醐天皇、花園法皇から注目された禅僧であったことを知ります。それは持明院統と大覚寺統ということにもなります。この両者の宗峰妙超・大徳寺に対する関わりの特徴をとらえて、「法の花園・寺の後醍醐」とでも称すればと、考えています。

### 三、寺の後醍醐

開創した大徳寺をどのように運営していくか、まず絡んでくるのは、後醍醐天皇です。後醍醐天皇は、大徳寺に寺領を寄進していたり、安堵をしていたり、あるいは大徳寺の寺域を寄進したりします。

建武の新政で実権を握った段階で、後醍醐天皇は大徳寺を本朝無双の禅院とします。日本に並びなき最高位の禅寺にする。その後、五山第一位の禅寺とか、あるいは南禅寺と名らぶ五山第一位の寺というように、大徳寺の寺格に非常に強い関心を示します。しかも大徳寺を宗峰妙超の一流相承刹とします。つまり、他派からの住持を入れない禅寺とします。

かつて、後醍醐天皇は政権を握った段階で、五山の位次を改定しますが、その時に東福寺をはずしたのです。なぜ外し

たかというと、東福寺は、開山円爾弁円（聖一國師）の一流相承刹なのです。五山官刹は十方住持制を原則としますからそれで外したのです。そうしたら、大学者で、『元亨釈書』の著者である虎関師錬は、東福寺を五山に列するように要請します。後醍醐天皇は、それを容れて東福寺を五山に入れたのです。五山に例外が作られたのです。

それはともあれ、五山官寺の住持制度が十方住持制であることなど、五山制度に知識があり、その原則に則ろうとした後醍醐天皇だったことが分かります。

その後醍醐天皇は、大徳寺の寺格を五山第一とします。そうすると、十方住持刹にしなればならないのに、一流相承刹にしたのです。後醍醐天皇は、何を考えていたのでしょうか。南禅寺との違いをみせるにはどうするか。それは、一流相承にすることだっただけかと思うのです。

かかる後醍醐天皇の外護を、宗峰妙超はどのように受け取っていたのでしょうか。元弘三年（一一三三）に後醍醐天皇は、五山第一の寺にする論旨を下賜しますが、宗峰妙超はそれを断ったというのです。また南禅寺住持にも請われませんがそれも辞退したというのです。これは大徳寺の寺格や名門刹に意を介さない修禅専一の禅僧であった宗峰妙超をいうための事例として、もちだされる話なのです。

ところが、史料を探してみますと、文書としては年記が入

っていませんのでいつのものが不明なのですが、開炉の日、  
炉開きの日だということとは分かつているのですが、その日に、  
今度大徳寺は、五山の冠たる寺になる、嬉しいことではない  
か、はやく造営を進めてくれるように、と手紙を認めていま  
す。これをみると、宗峰妙超は大徳寺の高い寺格を受け容れ  
ているではないか。なにもそれを拒否してはいないじゃないか。  
ということになります。

宗峰妙超は、決して大徳寺の寺格に無関心であった訳では  
なく、むしろ積極的にそれに対応しているのです。

#### 四、寺領荘園管理

先記の「示衆法語」や「遺誡法語」は、ややもすると大徳  
寺は財的に貧弱であり、そついつ中でも修行する弟子が本當  
の弟子だと理解されているのです。

ところが、大徳寺には数多の寺領が寄進されています。ほ  
ぼ土貢七千石くらいの寺領を持っていたということです。決  
して貧しい大徳寺経済ではなかつたのです。貧しい時に、貧  
しいから我慢せよというのは納得できません。しかし、裕福な  
経済状態の中で、折脚鑑内に野菜を煮てという、そついつ修  
行をせよ、というのはいと難しいと思つたのですが。

大徳寺を維持するためには、寺領荘園を安定した土貢収入  
があるものにしておくのが理想です。宗峰妙超は後醍醐天皇

に、一円不輪の寺領にして貰えるように請つたのです。僧衆が  
止住する寺に重要なことは、寺領の土貢を財源とする寺院経  
済であることを押さえているのです。

宗峰妙超が大徳寺の運営にあたらうとしたとき、寺院経済  
に関する課題は、憂慮される問題であつたとみられます。し  
かし、宗峰妙超がみせたそれら世事への対応は、決して逃避  
的ではなかつたし、寺領荘園を財源とする寺のあり方に否定  
的な考えをもつこともなかつたのです。

大徳寺の経済基盤が寺領荘園にあることを是認し、寺領の  
管理運営をおろそかにする事はなかつたのです。それどころ  
か、寺領に関して極めて強い関心をもち、その管理に積極的  
であつたのが宗峰妙超なのです。

「播磨国浦上荘地頭職の事、申し請わるるに任せ、葛西御厨  
の替えとして当寺に寄附せらるる所なり」と、後醍醐天皇か  
ら諭旨を下賜されています。これは下総国葛西御厨と播磨国  
浦上荘地頭職とを替地したもので、その要求は宗峰妙超の申  
請によつたのです。

替地は、自分の出身地の播磨でした。出身の播磨に替地を  
貰つたのですが、浦上氏の領地に替地してもらつたのです。有  
縁の浦上氏に管理して貰えることを期待してのことだと、私  
は思つたのですが。

さらに、替地の地頭職の半分を浦上氏に配分することを後

醍醐天皇に奏しています。この宗峰妙超の要求は、後醍醐天皇に認められて、浦上為景にその旨の論旨が下賜されることになり、それがなつたのです。大徳寺寺領を宗峰妙超は、ある意味で私的に浦上氏に寄附して管理するというやり方をとっているのです。

このような寺領経営のやり方をしている宗峰妙超なのです。それは、寺領管理は横領などで難しいですから、いかに安定した寺領荘園管理をするかということを考えた策であつたと思います。しかも後醍醐天皇という政権を握る外護者と関わりをもちながらです。

##### 五、尼道場の創設

宗峰妙超の禅を慕つて参禅帰依する道俗中には、女性がかなりいたと考えられます。その中でもよく知られているのは、花園天皇の皇后であり、「萩原ノ法皇ノ后ニ示ス」と題する法語が残っています。女性の参禅帰依者としては、花園天皇皇后のほかにも、宗峰妙超から母に「宗明大姉」の法名をもらっている地性大姉や、宗悟大姉、道因禅尼などがいたのです。ことに注目されるのは、「京都上北小路大宮敷地相伝系図」に見出せる妙覚寺尼衆です。

宗峰妙超に見るべきこととして、その女性の参禅者に対して、真摯に応えていることです。宗峰妙超は、女性の参禅者

に無字の公案を与えています。

ある参禅の徒の女性が見解を呈します。宗峰妙超は「未だだめだ」と、悟りに達していないと認めなかつたのです。その女性は、方便によって無字の公案を透過させてほしいと懇願します。その求めに対して、宗峰妙超は、方便を勞することをきっぱりと拒否します。そして、あれこれひねくりまわすならば、いくら年を重ねても、無字の公案を透過することはできないのだと諭します。

このような宗峰妙超の指導は、雲水はもちろんのこと、一般参禅者の老若男女の区別なく貫かれたとみられます。一般に女性の参禅者に対する指導は、仮名法語をもってなされ、方便を勞し、念仏をすすめるなどの事例が見られます。宗峰妙超も仮名法語『大燈国師仮名法語』をのこしてあります。宗峰妙超の仮名法語に見出せる説禅は、坐禅専一を勧めるものです。

ところで、先述の妙覚寺尼衆は、妙覚寺に居所を置く尼僧達であろうと思われませんが、妙覚寺にかかわる女性として、出雲路殿と称する洞院公賢の息女や藤原氏女などの女性がいます。

そついう女性達の受け入れ場所を宗峰妙超は設けます。それが妙覚寺です。今は廃寺ですが、旧跡は京都の今出川通りの北の五辻通りと大宮通りの交わる辺だろつと思つているの

ですが、まだ遺跡などによる場所の確認はしておりません。その妙覚寺の兼円と大宮局などによって、宗峰妙超に寺が寄進されます。その寺は、本堂一字、鎮守三社、鐘楼一字の建物があったのです。鐘楼には鐘がないということです。寄進を受けた宗峰妙超は、それを尼寺にします。女性専用道場を創ったのです。

尼僧堂を創った宗峰妙超は、それを宗峰の一流相承の寺となし、第一世住持に宗印尼という人を任命します。大徳寺では、「宗」の字は宗峰妙超以外は「ソウ」と読みます。それは、宗峰妙超の「宗」を「シュウ」と読みますから、それと同じく読むと失礼になります。ですから「ソウ」と読みます。その宗印という人を指名し、「法器抜群の意気有るに依って、我が弟子宗印大師を撰定して住持とする」といつています。

住持になる人物について、宗峰妙超法嗣で大徳寺第一世住持となった徹翁義亨は、「住持職は、内心慈悲を専らとし、偏枯の情にあらず、寺を守り衆を専らにして、専ら人を捨ててべからず」と、その器量を規定しています。つまり、学徒提撕と護寺、世事のいずれにも偏ることなく、慈悲心を篤くし人を大切にする宗教的人格をそなえた人物ということになります。

宗峰妙超は、その妙覚寺を大徳寺の直末にして、関係書類は本寺預かりとし、その経営費を大徳寺から出しています。

それは宗峰妙超が寂した後も出されております。大徳寺自体の土買収入が減っておりますから、額は少なくなっておりますけれど、出資は継続されたのです。

## 六、難僧教育

宗峰妙超は、建武二年（一一三五）に、十箇条にわたる寺規をつくっています。大徳寺の規則ですから、厳格な修行生活の規定です。条項中には三時の勤経の経、陀羅尼を覚えないう者は、衣鉢を取り上げて追い出せという規定もあります。宗峰妙超を語るとき、殆ど注目されないことのひとつです。

寺規十ヶ条の中に「小僧沙彌喝食」と表記する規定が二ヶ条あります。これは「小僧、沙彌喝食」とも読み、小僧と沙彌喝食ということになり、沙彌喝食は略して「沙喝」と称します。この寺規では「宗元沙彌」「小僧沙彌」と記されているところもありますので、「小僧、沙彌、喝食」と読み、小僧、沙彌、喝食に関係する規定であると考えておきます。

小僧は仏道に入った年少の者、難僧のことであり、沙彌は剃髪出家しているが一人前の僧でない者、喝食は有髪の童児です。

小僧、沙彌、喝食はいずれにしても年少の者であり、必ずしも正確ではないけれど、この寺規では広い意味での「難僧」ということで、とらえることができます。

ともあれ、難僧に関する条項は、注目すべきことの一つです。小僧、沙彌、喝食の教育、すなわち難僧教育を重視する宗峰妙超の考え方がつかがえるのです。

難僧に関する条項に、「小僧沙彌喝食は、三時の勤行の余は不用悪行を停止して、学文を専らにすべし。若し此の法を破らば、痛く五杖打ちて一日の粥飯を止めるべし」という規定があります。要するに小僧、沙彌、喝食は、三時の勤行のほかは、經・律・論の仏教学の勉強を専らにせよと規定しているのです。学問を奨励しているのです。小僧沙彌喝食における一日の生活は、三時の勤行と勉学にあることを知ります。それに違反すれば痛打五杖の上、食事を一日とらせないという罰則も規定されているのです。

宗峰妙超の学徒提撕における姿勢として、後世の人が注目するのは、坐禅による修禅であり、徹底悟道の道心を専一にかかげたことであって、学問や経呪を勧めたことに言及されることはほとんどないのです。

しかし、その宗峰妙超は、「こと小僧沙彌喝食にかぎって、經・律・論の三蔵を学ぶことを奨励し、それを厳命して、学徒育成の重要事としているのです。

宗峰妙超は、十一歳から書写山円教寺で戒や律を学び、經典を読み、教学、教史の研究に励みます。三蔵百家の書を読破して、それを会得したと自認する宗峰妙超なのです。しか

し、その宗峰妙超は、仏教の理屈を会得したものの、いまだ「仏道」を究めていないということに気付きます。そこで不立文字、教外別伝、直指単伝の宗にまざるものはないとして、禅修行による悟りの体得を決意します。十七歳のときであったということです。

宗峰妙超が寺規で難僧に学問を強く奨励するのは、学問で仏道を究めることはできないということに気づいたその体験を踏まえての難僧教育なのです。

また、難僧に対して、寺規で「小僧沙彌の不法悪行は、宗琳上座・宗廉上座行事すべし」と、小僧、沙彌の不法悪行については、宗琳上座と宗廉上座がとりしめるようにと、実に小僧、沙彌に関して、それに対応し得る体制を取り、二人の上座を任命しているのです。小僧、沙彌への指導監督を厳格にしている、ここに宗峰妙超が難僧教育にかける熱意を知ることができます。

## 七、紫野文化

今日はもう一つ、その宗峰妙超には文化性がなかったか。このことに少し触れておきたいと思います。

近年、五山と林下は日本史の用語として定着してきております。五山は足利義満の金閣、北山文化、そして足利義政の銀閣、東山文化が強調され、その流れの中で枯山水の庭園や、

水墨画など禅の文化が語られます。また茶の湯、茶道、茶人の出現が語られます。

中世文化の形成展開において、禅宗がそれに及ぼした影響は絶大であり、禅宗に視点を置けば、中世文化は禅文化の時代であったといっても過言ではないと思います。こと室町文化については、北山文化、東山文化に主導的役割を果たしていたのは、五山の禅であり、五山派です。概して、紫野の大徳寺に見出せる文化も、北山文化や東山文化の範疇、あるいはその延長線上において把握され、集約される傾向があります。

しかし、大徳寺は、茶の湯に深く関わり、戦国期の文化にも大きく影響を及ぼし、さらには京都中央文化の地方普及にも一役を担っているのです。この大徳寺を拠点に開花した文化は、大燈禅の精神が深く浸透し、それによって育まれた文化であって、室町期の精神文化に見出せる「道」としての熟成は、大燈禅を抜きにしてはあり得ないと思うのです。大燈禅の法灯を引つ提げた一休宗純など大徳寺の禅僧が出現したことによって形成され、開花展開した文化であったからです。

紫野に大徳寺を開創した宗峰妙超ですが、七堂伽藍を完備した禅寺の創建はめざましくなりました。仏殿を建てず開山堂の建造をも禁じ、「仏閣経巻に金銀を鑲め」といった

荘厳などは、もつてのほかであった宗峰妙超にとつて、寺は「一把茅底」で、修禅のための空間であればよかったです。

しかし、視点を变えて大徳寺を見れば、それは禅院建築であり、禅の造形ということになります。宗峰妙超の禅寺に対する基本的な考え方は、大徳寺に展開する禅文化の根本精神ということにもなるのです。

大燈禅に文化を育む要素がなかったのか。その視点で宗峰妙超をみると、宗峰妙超は大徳寺に池を造っています。池を掘れば、その土を積んで築山が造られます。池の名前は諸官池と名付けています。なぜ「諸官池」というと、諸の官人がきて造られたことによつたといわれています。それは一つの庭なのです。また、明月橋という橋も造っています。

池を造り、橋を架け、そうして、そこから東を見ますと比叡山が見えます。それを借景として達磨峰と呼んでいるのです。これはあきらかに宗峰妙超の一つの築庭というか、美的感覚、文化性だと思うのです。

宗峰妙超が開いた大徳寺に文化性を見出し、そこに一休、さらに近世に入つて江月宗玩だとか、玉室宗珀だとか、沢庵宗彭だとか、茶道と関わる大徳寺僧の出現があり、寛永文化の展開に多大の役割を果たすのです。また、北山・東山文化を現出させた室町幕府が潰れた後に、それに替わって歴史の舞台に出てくる新興の人々によつて育てられ、支えられて充

実します。

その文化は、京都の室町期の文化あるいは中世文化の中において、北山文化と東山文化と区別してもよい文化のように思うのです。さらに、京都の戦国期から寛永期に至る文化を再確認する手掛かりにしてみてもどうでしょうか。それによって、京都文化、今日の日本文化を代表する京都発の日本文化の理解に「道」の精神に注視した厚みを加えることができるのではないか。そのように考えております。

大徳寺を拠点とする文化を特別視してみませんかといったのです。北山文化と東山文化は北山、東山の地名に因っているならば、紫野の地名によって「紫野文化」と称しては如何でしょうか。

湘南宗沅が編した『宝山記談』に、「山林の立つ所は、一に志、二に信、三に参禅。叢林の立つ所は、一に世諦、二に入応、三に学問」といつています。山林は山隣派、叢林は五山のこと、山隣派と五山の相違を端的に示しているのです。が、「参禅」の山隣派即ち大徳寺と、「学問」の五山という捉え方は、禅文化を育む基本的なあり方として注目してよいと思いません。

「学問」の五山に展開した五山文芸などは、禅に付帯した文化性が育成されたものであるのに対して、「参禅」の大徳禅の精神を真髄或いは根本として育まれた「道」文化が大徳

寺の禅文化であり、茶道など「道」の精神文化に深いかかわりをもったと思うのです。このことは相違点として注目すべきで、同じく禅文化といっても、同一視しないほうがよいのではないか。そのように考えるのです。しかしながら、今のところ暗中模索です。

纏まりのない話を長々と致してしまいました。一つには宗峰妙超の見直しを試み、一つには紫野文化という提言めいたことを述べさせていただき、宗峰妙超の諸相とはそういう諸相ということで、終わらせていただきます。

本日はお招きいただき、拙い話にご清聴下され、誠に有り難うございました。